おやすみ、とーほく。

kueru1943

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２２／０９／２５に他サイトで上げた作品。

なんだか耳が痒そうなきりたん。そんな彼女を見て、ウナは耳かきを提案する。

目　次

おやすみ、とーほく。 ―――― 1

おやすみ、とーほく。

「うーん……」

読んでいた漫画本から目を離し、悩ましげに呻く友人の方を見遣る。

声の主である友人――東北きりたんは、小指で耳をかっぽじっていた。言葉通り。比喩ではなく。

「とーほく、それ女の子的にあんまりよろしくないぞ」

「んぇっ!?　み、見られてしまいましたか……」

それなりに恥ずかしかったのか、指を引っこ抜きながら気まずそうに言葉を続ける。

「その、急に耳の奥が痒くなってしまって、不可抗力といいますか」

まぁ、それ以外に指を耳に突っ込む理由はないと思うけど。

ここでふと、最初に聴こえた呻き声がやけに悩ましげだったことに気づく。少し痒いくらいなら声を上げる必要もないはず。これはもしや。

「とーほく、まだ痒い?」

「ええ、まぁ。どうやら指では届かない位置にあるようで」

よしきた。

「じゃあ私が耳かきしてあげる！　道具持ってくるからちょっと待ってて！」
「えっ、ちょっと！」
　親愛なる友人が困っているのならば、手を差し伸べるのが友の務めだ。これは善意であって、決して興味本位などではないぞ。うん。
＊
「耳かき棒と綿棒、どっちがいい？」
　包丁の髪飾りを外し、私の太ももに頭を乗せたとーほくに尋ねる。
「どちらでも構いませんよ。とにかく痒みをどうにかしてほしいです」
「おっけー、じゃあ耳かき棒でやってこうかな」
　……
「鼓膜破ったらごめんね？」
「ひえっ、怖いこと言わないでくださいよ……」
　そんな脅しも挟みつつ、耳の中の掃除を始めていく。本当は耳の外からやっていくのが良いらしいけど、その間ずっと痒いままなのも可哀想だし。
「どこが痒い？」
「下側、足の方です。あ、もう少し奥」
「ここ？」

言われたとおり、棒を少しだけ奥にやると、
「んぁっ、そこです！」
良い反応が返ってきた。確かに少し深い位置だし、指でどうにかするのは難しいかも。
「よしよし、力加減大丈夫？」
「はい、ちょうどいいです……」
どこか張り詰めていた表情が一気に緩んでいくのを見て、思わず私の顔もほころぶ。気持ちよさそうだ。
しばらくカリカリと掻いてやると、満足した顔になっていくのがわかった。
「はぁ……すっきりしました、もう平気です」
「それはよかった！　じゃ、改めて入口の方から掃除していくね」
「……本当にやるんですか？」
なぜ怪訝そうな顔をするんだろう。
「当たり前でしょ？　なんのために耳かきしてると思ってんの？」
「わ、私を痒みから救うためではないんですか!?」
「逆に考えるんだ、痒みから救ってくれた恩人への対価が耳かきなら安いもんだろ？」
「最悪鼓膜を破られる可能性があるんですよこっちは！」

うるさい奴だなぁ。
しかし、文句を言うわりに暴れたりしないのは利口だ。生殺与奪の権をどちらが握っているか、よく理解している。
「まぁまぁ、私も最大限気をつけるからさ。力はこんなくらいでいい？」
「気をつけてもらわなきゃ困りますよ。加減はまぁ、ちょうどいいくらいです」
ようやく観念してくれたようだ。太ももにかかる重さが少しだけ増える。
カリカリ、カリカリ。
さっきまで言い合いなんかして気づかなかったが、とーほくの耳はかなり柔らかい。耳たぶが柔らかいくらいならよくあるけれど、耳の縁まで柔らかいのだから驚きだ。
こうして耳を綺麗にしてやってるわけだし、少しくらい弄ったって罰は当たらないだろう。これも役得というやつだ。ふにふに。
そんな恩着せがましいことを考えていると、とーほくが何か言いたそうな顔をしていることに気づく。
「どうした？　くすぐったい？」
「ああいえ、そういう訳では無くてですね……」
口をもごもごとさせている。なにか秘密の暴露でもしてくれるのかな。
「その、私の耳、どれくらい汚れてますか？」

なんだ、そんなことか。そんなに恥ずかしがることでもないのに。

……いやしかし、何気に回答に困る質問だぞ、これ。

「……普通、くらい？」

「な、なんですかその間は」

しまった、バッドコミュニケーションを踏んだかもしれない。

実際のところ、とーほくの耳は綺麗な方なのだと思う。入口付近にほとんど汚れは無かったし、奥の方にいくつか気になるのがあるな、といった程度だ。

「でも、結構綺麗だと思うよ。マメにやってるの？」

「まあ、二週間に一度くらいでしょうか。そんなに頻繁にはやってないですね」

頻度を決めてやっているだけ私より偉いな。まさかとーほくに人間力で負ける日が来るとは。

カリカリ、カリカリ。

「よし、こんなもんかな」

覗いて見える汚れはあらかた取り終わって、綺麗だった耳がさらに綺麗になった。我ながら良い仕事をしたと思う。

でも、まだ最後の仕上げが残ってるよね？

「ありがとうございます。じゃあ」

「あ、ちょっと待って」
反対側を向こうとするとーほくを制止して、彼女の横顔に私の顔を近づける。
「ふぇっ!?　な、なにを――」
そのまま、耳に向けて、
「ふ～～～～」
「あひゃあっ!?」
ゆっくりと息を吹きかけた。
「あっははは！　変な声！」
「もう！　急になにするんですか！」
耳を真っ赤にしながらぷんすか怒っている、想定以上の反応が見られて大満足だ。
「ふふっ、ごめんごめん、悪かったよ」
謝ってもなおぷんぷんしているとーほくに、改めて反対を向くよう促す。
＊
さっきまで太ももに圧されていたせいか、反対側の耳も赤くなっていた。
熱を持った耳は、先程までとはまた違った柔らかさをしている。これはこれで――
「音街、さっきから気になってたんですが」
「ふぇ？」

完全に意識を逸らしていたので、思わず変な返事をしてしまう。
その、と言葉を置いてから、とーほくは言った。
「なんでずっと私の耳揉んでるんですか？」
「っ!?」
バレていたとは。
まさか感触を楽しんでいたと言う訳にもいかず、なんとか誤魔化そうと弁を弄する。
「あーえっと、そう！　これは耳のマッサージ！　よく言うでしょ？　耳にはツボがいっぱいあるって、確か妊婦さんが眠ってるみたいな形で、」
「妊婦ではなく胎児だったような気がしますが……」
くっ、物知りめ。
「……嫌だった？」
「いえ別に、むしろ――じゃなくてっ、少し気になっただけです」
とーほくが優しくて助かった。それに、膝枕で顔が見られないのも都合がいい。誤魔化した焦りと恥ずかしさで、きっと私の耳も赤くなってる。
カリカリ、カリカリ。
ふと、思っていたよりも耳かきに集中している自分に気づく。最初こそはただの興味本位だったけど、段々と癒されたような顔になっていくとーほくを見ると、もっとやっ

てやりたいという気持ちになる。
……もしかしたら、とーほくだから、なのかな。
「音街は、普段誰かに耳かき、してるんですか？」
「いや？　なんで？」
「なんというか、恐ろしいことを言っていたわりには、上手だなぁと……」
「へへ、ありがと」
眠気に襲われているのか、言葉がゆっくりに、途切れ途切れになってきている。
「ちなみに誰にしてると思った？」
「ふぇ、うーん……ついな、とか」
「ついな？　ついなかぁ……なんか頼んでも絶対やらせてくれなさそう」
「ふふ……たしかに……」
間の長さから察するに、おそらくもう限界なのだろう。きっと、あともう少しでもすれば――
「すー……」
思った通り、可愛らしい寝息が聴こえてきた。
さて、私の方もあと少しだ。さっさと終わらせてゆっくり寝かせてあげよう。
カリカリ、カリ……

よし、終わり！

耳も綺麗になったところで、起こさないようにそっと片付けを始める。ゴミを捨てようにも動けないため少し難儀したが、意を決したゴミ箱フリースローが見事に決まり、ほっと胸をなでおろした。

少し落ち着いて、改めて膝で寝ているとーほくを見遣る。どうやら可愛らしいのは寝息だけではないらしい。まぁ顔が可愛いなら寝顔も可愛いというのは当たり前だけど。

いたずら心で、彼女の柔らかそうなほっぺたをつついてみる。少し違和感を覚えたのか、「んぅ……」と小さく反応を返した。

その声を聴いた私は、瞬間、彼女を力強く抱きしめたい衝動に駆られた。なんだろう、この感情は。こんな気持ち、今までなかったのに。

でも、なんだか知っている気持ちのような気がする。そう確か、可愛らしい動物やぬいぐるみを前にした時にも――。

そこで気づく。

ああそうか、私は、彼女に愛おしさを感じているんだ。

でもきっとこれは、小動物やぬいぐるみに感じるものとはまた違うものだとも思う。だって、今のこの気持ちは、そんなんよりももっと深くて、もっとドキドキしているから。

ずっと、なんとなく気づいていた。この気持ちには名前があって、だけど、それに気づかないようにしていた。

でももう、耐えきれないや。私のわがままのためにあなたを起こすのは忍びないから、抱きしめるのは無理だけど。

でも、言葉なら、言葉くらいなら。

「大好きだよ、とーほく」

小さく寝息を立てる彼女に、そっと耳打ちする。せっかく綺麗にしたけど、これじゃ意味ないな。

自嘲しながら、自分も目を閉じる。ずっと寝顔を見ていたら、そのうち言葉だけじゃ足りなくなりそうだ。

おやすみ、とーほく。今度また耳かきしてあげるね。そしたら今度は、綺麗な耳の、起きているあなたに、ちゃんと伝えるから。